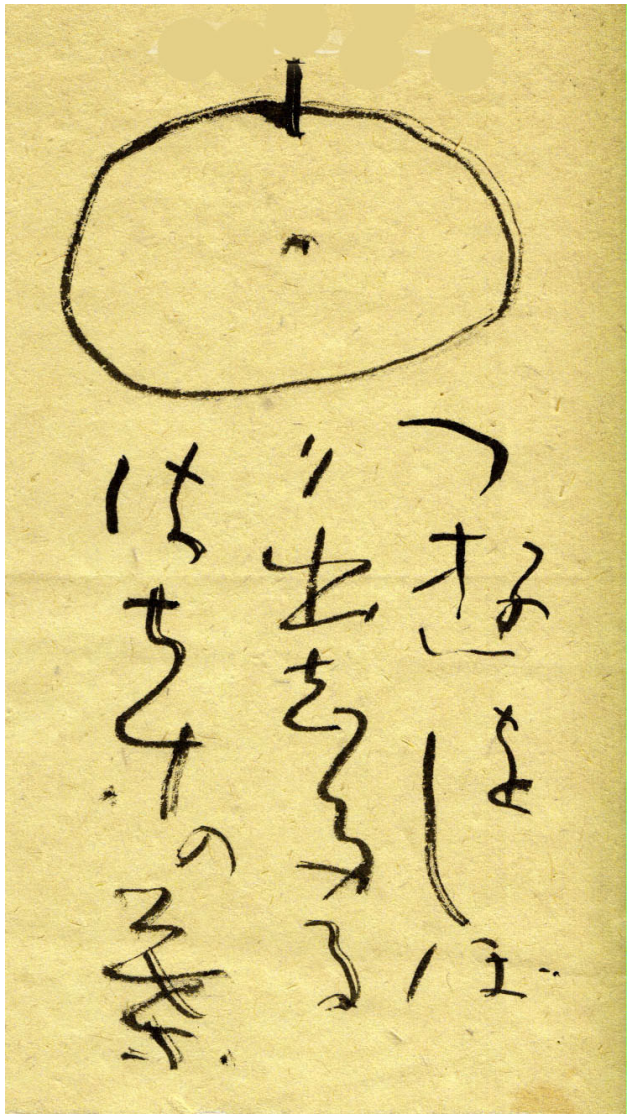
あさ 6

2025

撮影：墨沱



昏蚓龜虵

白露を絞り出したるはちすの葉　佐藤喜孝

あを

六月集

坐・誹

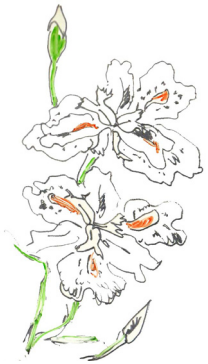
佐藤　竹僊

あをやぎのヒカリをふくみふくらみぬ

白菜の唯我獨尊春の畑

髪ぬれて亂れし雨後のハルジオン

入梅やときどき梅雨をなつかしむ



苗育つ雨に足出し坐つてる

五月晴下着のやうにマスクかけ

トンボ誕生一日其處に雨や風

いちめんの夏野迷兒になつてゐる

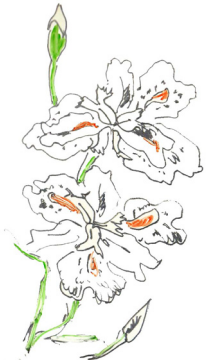
火事ですと警官告ぐる風邪をひく

雪つもる煎じつめれば竹に雪

下部温泉

赤座典子

急峻に三極の花滝をなす
離れ屋の壁の陽炎鎖樋
ぬる湯あつ湯ケロリンの桶残る花
道の駅待つ文鳥へ冬菜選る
清明や「ジェンダーは平等」といふポスター
くるくるとちりちりと揺る花みづき
草餅の菓子器伊勢型紙模様
宅配遅し黄金週間初日かな



ゆく春

秋川泉

春雷や走り走りて角まがる
竹の子や地表を割りてむくむくと
ピカピカの自転車曲乗り花嵐
春の日を廊下三度目拭き直し
雨になる切ってしまおかチューリップ
トンネルをぬけて一面花の雨
花吹雪鴨はゆるりと昼寝中
おにごっこ一面の花ふみしめる

進級

七郎衛門吉保

入学の仮の席決めあいうえお
進級や♯♭声変り
桜の句半数を占む句会かな
日蓮の法衣に似たる糸桜
桃源郷景色に酔ふやワインの地
関税と数字舞ひ上げ春疾風
春嵐四年続くかこの愚か
春落葉花弁に混じり蘇る
英雄をプーチン多産兜太の忌
時移り時の首相もメーデーに

灌仏会

篠田純子

灌仏会 What is this と米国人
えいぷりるえいとぶつだばーすでいふえすてばる
きらきらの稚児のかうべや灌仏会
ちさき手を合はすや誕生仏ひかる
定信公の墓前芳し花御堂
等身大の「大鵬・王鵬」夏近し

騒音計

篠田大佳

うららかや下谷の街の呵呵大笑
少年は騒音計に叫び春
花の雨客なき発車サイン音
春しうう駅舎の灯ぱつと消え
腹這ひにサクラとニンジャ仰ぐなり
春や稚児自然のままに灌仏す
満開の桜散るのねかはいさう
タワマンの横に影出す春満月
レガシーが街にとけこむ昭和の日

花

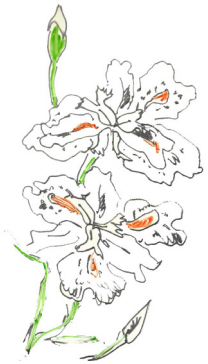
須賀敏子

此処に来て桜と共に老いにけり
老木の鞭打つ様に花開く
夜桜や遥かな月を見上げたり
ベランダではためくTシャツ飛花落花
エプロンを新しくして花衣
落椿落ちて落ちてもまだ枝に
牡丹咲く寺に開基の像二人

内科医様

長崎　桂子

ごみすてる小学生のゑみ春休み
黄水仙咲いて回りをほほゑます
春の日の窓あふれゐておやつ時
春めくや畑たがやす二人連れ
温室のガーベラ新入生は夢語る
はな開き高校生の音楽祭
花盛り花いろうすき疲れかも
内科医様締めると悲しき四月
内科医様の教へ心にの春
黄砂くるニュースうんざりし泪



雑詠

森　なほ子

長生きの媼ふくよか豊の秋
我入るはも少し先の墓洗ふ
咲き継いで終りの薔薇の色さやか
いないいないばあと満月雲出ずる
この服も派手になりしと秋扇
払はれて出湯に浮きたる羽虫かな
浅川を缶流れ行く秋の音
乳飲み子を抱く埴輪や冬温し

烝收集

木の芽風鹿はそよぎて佇めり　佐藤　竹僊

まんさくの花散らしたやうにちらし寿司　森なほ子

青空に花満ち池にボート群れ

春ショール少し明るく髪の色　赤座典子

鞦韆やあの日あの時多過ぎる

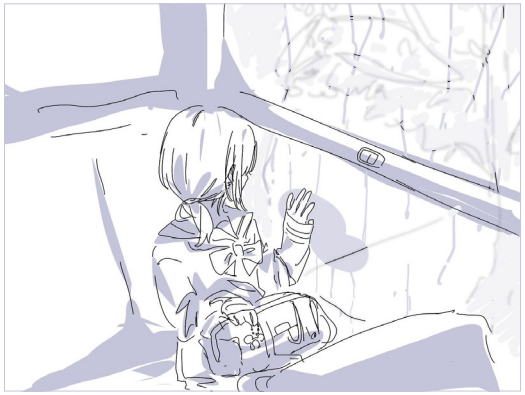
風花や初のこの駅この街に　秋川　泉

夕闇に淡雪にぬれ野の佛

堅雪の壁の高さや赤信号　七郎衛門吉保

旅続く己が心の雪晒

桃の花一枝そろばん玉のごと



ポケットのぷくと膨らみ春遊び

風光る記事の見出しの七五調

江戸城に天守閣てふ胡蝶の夢　篠田純子

花の雨佃小橋の甃

春雪は都会の朝へうたひけり　篠田大佳

墨堤にうたふ彼岸のさくらかな

侘助の花の中なる目白かな　須賀敏子

五年目のサクランボの花開く

威勢よき奈良のもちつき草餅に

囃し立て草餅つくる奈良の春　長崎桂子

四月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

きさらぎやまた廻りだす走馬燈　　佐藤竹僊

何かのきっかけで、忘れていた記憶が、突然よみがえります。その光景には、様々な人物や言葉が続いて出現し、走馬燈のようです。その流れゆく景色に、「そういう事もあったな」とか「あれは、そういう事だったのか」などと、気付かされたりします。作者にとっては、その出現が、嬉しい出来事の一つであって欲しいです。（典子）

隣家の燈消えて消えたる春の雨　　佐藤竹僊

雨が消えるというのは発見です。隣家の灯りが相当強い光で、夜に消灯した途端に春の雨が見えなくなったという景を想像します。音も聞こえない小雨だったのでしょう。存在が確認できなければ、たとえあってもないのと変わらないというのは人間の主観に起こる問題ですが、人間の主観を難しい言葉を用いず、雨が消えると軽い調子で読者に提示しています。（大佳）

大屋根のつらら朝日きてきらめく　　長崎桂子

屋根にできた氷柱が朝日にあたってきらめいている。光景はシンプルですが、太陽の熱や、冬の朝のぴんと張り詰めた空気、寒暖差に融点を行き来する氷柱の息遣いのようなものまで、脳裏に再現されていきます。作者の辿り着いた一つの境地を見ます。（大佳）

ごみを出す応援歌のごと朝烏　　長崎桂子

体力がなくなると今まで何でもなかつた事、たとへばゴミ出しまでが一仕事になる。まとめて大きくなつたゴミ袋を集積所までやつこらさと運ぶ。そのやうな折、カラスに鳴かれた。親しいものに〝頑張れと〟言はれたやうに桂子さんは聞こえた。句の中には鳴いたとは言つてない。「朝烏」とだけの表記である。この句の良きところである。（喜孝）

古都うららら鹿に挨拶返しけり　　森なほ子

作者は、奈良へ旅行された際、奈良公園に寄られたのですね。鹿たちは皆とても人に慣れています。餌のお煎餅めがけて突進してくる鹿には、気を付けなければいけませんが。なほ子さんに近づいてきた鹿には、挨拶をされてしまいました！　あのつぶらな瞳で首など傾げられたら、これはもう、こちらもにっこりと挨拶を返す他ありませんよね。貴重な思い出を詠まれました。（典子）

三輪山を旅の始めや冬青空　　森なほ子

掲句を読んで芭蕉の「風流の初（はじめ）やおくの田植うた」をおもひだした。旅に出ると、句心歌心が

不思議と湧く。歌枕を尋ねるのもたのしみのひとつ。俳枕といふ言葉も聞く。今回の作者の旅は古都奈良のやうだ。三輪山を望める地に立ち、まづは「冬青空」との朴訥な措辞も俳句らしい。旅心に溺れるところを引き止めてゐる。「焼きたての草餅熱し歩きつつ」と、日常からの解放感からか、お上品な作者にして歩き食ひである。さぞやおいしかつたことであらう。「古都うらら鹿に挨拶返しけり」と弾んだ旅の様子が伝はる作品群であつた。（喜孝）

焼きチョコの銘「かくれんぼ」春兆す　　赤座典子

かくれんぼとチョコレートの取り合わせが可愛らしいです。お菓子の詳細はわかりませんでしたが、形状に工夫のあるお菓子なのかなと想像します。子どもが手に取るものに、大人からのメッセージがこもっているというのを、大人になると感じ入ります。「春兆す」という季語に、子どもの好奇心の芽生えを喜ぶ気持ちを読みます。（大佳）

朝食のラストオーダー霧の花　　赤座典子

毎日毎日の朝食と違ふことを「ラストオーダー」で伝へてゐる。硝子の窓越しに「霧の花」が望めたらなんと素敵な朝食であらうか。「古民家の厚き引戸や猫柳」の「厚き引戸」で立派な古民家であると知らせてゐる。このやうな古民家に「猫柳」を点ずる。其処に在るからといふことよりも、これは作者の美意識である。この二句とも動詞不使用である。動詞がおもしろく働いてゐる一句に「市民センター通り隔ちて種物屋」がある。「市民センター」とあるから地方都市らしい。道を隔てて種苗店がある。種苗店を「種物屋」といふだけでこの町のやうすが形になつて現れてくる。〝種物〟〝種売〟は春の季語だが「種物屋」は一年中在るから無季ではといふ疑問も生じる。が、そこは忖度していただきたい。（喜孝）

雪の夜や古傷痛む人のあり　　秋川　泉

気圧が低くなると古傷が痛むという話を聞きますが、最近は気圧が低くなると、注意喚起するアプリというのもあります。低気圧の不調を補助線にして、雪の夜、気分が高まっているのに、低気圧で古傷が痛み、あまり雪を楽しむことができないもどかしさを読みます。（大佳）

微積分ここでつまづき二月尽　　秋川　泉

二月は試験の月。受験子を抱へる家庭では受験は一大イベントである。泉さんは自身のことに顧み、微分積分のところで数学は……とあまり愉快でない思ひ出がよみがへる。微積分に縁のないわたしもどんなものか気になりEチャンネルの高校講座で分かりやすく?図解説されてゐた。録画して頭の体操とばかりにときどき眺めてゐる。結果はまだ珍紛漢紛。泉さんの二月は屈折のある季節のやうだ。（喜孝）

色氷柱谺する声多国籍

七郎衛門吉保

「色氷柱」というのは、色々な想像ができます。氷柱が自然の鮮やかな色を取り込んで反射しているという様子もありますし、巨大な氷柱にライトアップして、光の表現をしているとも取れます。偶然の発見か、意図的な表現か。いずれにしても、氷柱を見た感動の声が漏れたことでしょう。色々な文化を根拠とする思い思いの言葉が氷柱へ向けられて、跳ね返ってくる楽しさを読みました。（大佳）

梅の花終りは大地の金平糖

七郎衛門吉保

俳句では梅は蕾を詠み、花を詠みそして梅の実を茂つた葉の中に探す。桜と違ひ最後は食べてしまふ。掲句は梅花の散りやうを詠まれた。なんとも愛らしい句の仕上がりである。往往にして齢を取るとわらべ心を忘れがちだが、七郎衛門吉保さんは確りと保持してをられる。（喜孝）

さし石に力持ちの名麗けし

篠田純子

テレビで見た、佃島の風景に、「さし石」と朱色の字の彫られた楕円形の大きな石がありました。ネットで調べると、形は、丸形か楕円形、60～70㎏から200㎏近くと、大層な重さです。それを持ち上げた力士は、名を刻まれ、人の目に付く所に置かれて、大いに誇らしかったことでしょう。春の日を受け、朱色の字が輝いています。（典子）

天安（てんやす）の暖簾春風孕みをり

篠田純子

暖簾には関東型、関西型があるといふ。竹竿に暖簾を提げる方法が違ふらしい。また、この句の暖簾は蕎麦屋や居酒屋に掛けてある暖簾とは違ひ「日除け暖簾」といふ一枚の布の下端に重石をつけてあるもの。その一枚の大きな布が春風を孕んで膨らんでゐるといふ。私が感心したのは店名の「天安」である。佃島の佃煮屋さんの「天安」。この店名があつてこその記憶にのこる一句となつた。（喜孝）

けふ令和「やつぱあたしは梅派かも」

篠田大佳

その昔、花といえば、桜ではなく、梅の花を指して言われていたそうです。今でも梅の花を推す人は、根強く存在するらしいですね。作者にきっぱりと宣言している令和の若者も梅の花推しなのですね。そして、その言葉が、そっくり句になっています！　全く同じ物言いで、ワイワイと騒いでいた身としては、びっくりで、懐かしかったです。この面白い句を作られた、作者の意図にたどり着けず、心残りです。（典子）

白熊の池の空気は張り詰める

篠田大佳

動物園で句を詠むのにはいくつかの関門がある。

獣園に石蕗咲き犀が固めた土　木村光雄
獣園の熊あぐらかき草餅食ふ　関合正明
獣園を出づる小流れ鬼やんま　高島　茂
日輪の下（もと）獣園に夏きたる　飯田蛇笏

一つには季語の問題。動物園の檻の中の熊は冬の季語と一概にはいへぬ。動物園の丹頂鶴と分かつていただくやうに詠まねばと苦吟するときもある。

ペリカンの飛びくる動物園のどか　中村吉次郎
秋の蝶動物園をたどりけり　正岡子規
動物園さわやかに象みえ来たる　京極杞陽
動物園春のキリンの走驅見し　佐藤喜孝
方舟みたい梅雨寒の動物園　大日向幸枝

「獣園」または「動物園」と詠めば紛れはない。なかには知らんぷりをして大自然の中の動物を詠んだ振りをする句もあるかと思ふ。

掲句は「池」で飼はれてゐる白熊であると明確にしてゐる。さて「白熊」を季語として扱ふか。いや、そんな些末なことは棚上げにして……。角川合本歳時記、ホトトギス俳句季語便覧にはない。ネットではと検索すると冬の季語として扱ふところがあつた。季語も地球規模になつたやうだ。掲句の「白熊」は季語であるかはともかくとして、実物を眼前にした作者は白熊からのオーラに感じられたやうだ。そのことを率直に詠まれてゐる。（喜孝）

ボールペン三本並ぶ月朧　須賀敏子

敏子さんは、3本のボールペンで、いつも句を作っていらっしゃるのでしょうか。月とボールペンを交互に見つめている光景を想像しています。でもその日は、そのまま終わってしまっても、ふと深夜に、句が浮かぶことがありますよね。枕元のメモ帳に書き留めておけば、提出の最後の句になるかもしれません。すみません、おぼろ月に身につまされて、我が身に起きた状況を書いてしまいました。素敵な題材に巡り合われる事をお祈りいたします。（典子）

§

珍しく自身を消した句のやうだ。作者の詠みごころは何処に有るか不確かだ。碧梧堂の「無中心論」など想起した。ボールペンが其処に在ることも必然のやうでさうでもない。数の三本も然り。机辺から窓の方をみれば月朧。このやうな句づくりも無責任な詠みぶりに見えるが、作品として残るのは容易くはない。見過ごしがちなおもしろい一句であつた。（喜孝）

春の夕焼背番「16」の子がふたり　ねじめ正也

篠田大佳

作者は「暖流」所属。詩人・作家のねじめ正一氏の父。句は『蠅取リボン』（一九九一年　書肆山田）所収。昭和三三年の作。

句の背景については、『増殖する俳句歳時記』の清水哲男氏や八木忠栄氏の記述が参考になります。野球で遊ぶ子どもたちは、銘々であつらえたユニフォームに好きな背番号を付けるそうです。読売巨人軍の川上哲治の背番号16が当時の子供の間で人気の番号で、みんな競って16の数字を取り合っていたといいます。夕焼けを背に泥だらけの少年たちの歩く姿が浮かんで、物はなくても人情が豊かな時代を想像します。

日本のプロ野球では、競技の長い歴史の中で活躍した選手たちの背番号が印象されて、「エース番号は18番」、「強打者といえば55番」、「打って走れる7番」、「好守の捕手は27番」のように、だんだんと定型化していっています。後世の選手が背番号を受け継ぐというのは、名前を継ぐような重みを感じます。期待は時にプレッシャーになることもあるでしょう。球団やファンからの期待に応えられた一握りのアスリートの名前と背番号が書かれた、揃いのレプリカユニフォームを着た少年や少女たちが、春のデーゲームの終わりに今日の試合を振り返る。現代に舞台を移植すると、そういう光景が浮かびます。

時代は変わって、体を動かすことから見るものへ変わっても、贔屓の選手の背番号を背負うことは、変わらず少年少女を魅了しているように思います。背番号には不思議な魅力があります。好きな背番号を背負っていた少年少女がやがてチームに所属して、自分の背番号を争う物語が今日もどこかで紡がれていますが、物語の結末は、銘々の胸の内に……。

俳句と着物　第六話

夏の着物　その二　浴衣　七郎衛門吉保

今回も恐縮だが、暑さ対策の話となってしまう。六月十七日のあおやぎ句会開催日。前日に準備した衣装は、衣更えの時期に合わせて、浅黄色の薄手紬の単衣の長着、それと同じく薄手の長襦袢と羽織にしていた。

ところが当日朝になると、三十五度超え、熱中症警報の天気予報となってしまった。着物には暑さ対策の知恵が詰まっているとは言え、準備したセットでは熱中症促進になりそう。そこで急遽Tシャツスタイルに変更して参加した。

盛夏用の着物として、絽・紗・上布・生布など、風通しの良い素材が使われる。しかし、体感四十度近くなっている今日では、夏着物の持つ機能を超えてしまっている。

そんな中で浴衣が、夏の着物としての存在感や、期待感を、増していくのではと思われる。とりわけ男の浴衣の装い、ステテコとクレープ地の汗取りシャツ（いずれも季語）との組合わせ。この簡便さが、浴衣の利用度を増すのではと。

今までは、六月に浴衣を着る季節感はなかったが、感覚を変えることが、必定になっているのかもしれない。

あおやぎ句会では、七・八月にも予測される異常高温続きを考慮して、この間は、PCやスマホとネットワークを活用した通信句会を選択した。これも今風の暑さ対策の知恵なのだろう。

少し派手いやこのくらゐ初浴衣　草間時彦

青年の長き手足や初浴衣　永井和子

季語あれこれ　「桜・弥生・ほか」

蛍ほど印象的な昆虫はさうゐない。一度見た印象は長く記憶にのこる。映像で見る蛍とは大違ひ。

ほたる火や酔ひては傘をさがす人　赤座典子
酒少し濁りて哀しほたるの夜　渡邉友七
ほたる沢の真昼緑の陰ゆれて　木村茂登子
厚き本ほたるがほつとこぼれおつ　佐藤喜孝

「ほうたる」は五七五に整へるための苦肉の策か。これに類似の季語で「牡丹」がある。「ぼたん」を「ぼうたん」と使ふときがある。

ほうたるの熱き吐息を手に髪に　森山のりこ
ほうたるやふたつ触れあふことのあり　定梶じょう
大いなるほうたるあらぬ方にともる　定梶じょう

ぼうたんに佛の歳も三つかな　高浜虚子
ぼうたんのあかるさおよぶ中二階　八田木枯
ぼうたんのいのちのきはとみゆるなり　日野草城
ぼうたんの花のゆるるはきはどけれ　八田木枯
ぼうたんの戸を閉めかねる夕べかな　高島　茂
ぼうたんやしろがねの猫こがねの蝶　蕪　村

牡丹は中国語で「ムータン」ときこえる。少し「ぼうたん」に忖度できる。が「ほうたる」は中国語の援助はないが、童謡「ほたるこい」に援軍がゐる。歌詞は

ほう　ほう　ほたる　こい
あっちのみずは　にがいぞ
こっちのみずは　あまいぞ
ほう　ほう　ほたる　こい

であるが唄声は「ほーたるこい」と聞こえる。「ほうたる」を一概に整音の為だけとは云へないかもしれない。蛍に呼びかけるとき「ほたるこい」より「ほーたるこい」の方が優しく親しみがわく。

うまれたる家はあとかたもないほうたる　種田山頭火
けふもいちにち誰も来なかつたほうたる　種田山頭火
ほうたるこいこいふるさとにきた　種田山頭火
ほほうたるの手にともりたる匂ひかな　高島　茂
ほうたるの草を離れて遊行かな　京極杞陽
ほうたるは全体重を使ひけり　あざ蓉子
ほうたるや闇が手首を掴みたり　藤田直子

蛍にはなぜか一期一会といふ言葉が浮ぶ。

いく千の螢ひとつに明滅す　ＴＩＮＡＵＮＧＭＯＥ
てのひらに光る螢のやはらかし　早崎泰江
校庭に子らと並びて螢待つ　早崎泰江
手灯りにすいと螢の好奇心　赤座典子
かこひたる掌にふれずして舞ふ螢　赤座典子
手の裡に光かさねて螢舞ふ　赤座典子
つかのまの螢の浮揚闇深む　赤座典子
草螢芭蕉隠密てふ話　田中藤穂
てのひらに螢のひかりはずかしや　森　理和
螢舞ふ目白二丁目雨水桝　森　理和
螢や指提灯をもれ出でて　佐藤恭子
約束の水際に立つ恋螢　関口ゆき
恋失せし昼の螢のなまぐさし　関口ゆき
考への果ての一字や螢の夜　関口ゆき
谿深く螢の光ふるままに　芝宮須磨子
漆黒に螢の浮游谿深く　芝宮須磨子
明月記読み疲れたる螢の夜　芝　尚子
大正のながれ残れる螢かな　長崎桂子
束の間の恋のまばたき蛍の夜　森山のりこ
石臼に螢ねむるや風の中　渡邉友七
蛍火に誘はるるごと闇の中　森山のりこ
せつせつと蛍の乱舞つづきけり　森山のりこ
はかなくて哀しきものよ蛍の火　森山のりこ
巨き手の中にをののく姫蛍　森山のりこ
細々と光の帯の姫蛍　森山のりこ
螢火や家族の夕餉起伏なく　渡邉友七

いつの世のだれかは知らず螢文字　佐藤喜孝
螢籠深夜の余震揺りてけり　定梶じょう
高きビル蛍火となる警告灯　遠藤　実
螢火や紙の音する枕當　佐藤喜孝
蛍袋虻の唸りにふくらみぬ　早崎泰江
螢火の一つは消えず眼裏に　木村茂登子
外燈が尽きて蛍の中にゐる　吉成美代子
立て札に蛍の寝床花あやめ　森　理和
わくわくと蛍に合はせ早夕餉　森　理和
蛍くさい掌嗅いで別れけり　竹内弘子
薄明り帰り来たるらし夕蛍　長崎桂子
八重山のおまんがときの蛍かな　須賀敏子
蛇の眼とみまごう蛍闇夜かな　秋川　泉
蛍の月にとけゆく高みかな　佐藤恭子
またたきて星をさそひし蛍かな　佐藤恭子
蛍火のしづまりてまた星空に　田中藤穂
子の捕りし蛍二つや悲喜の籠　七郎衛門吉保
いくたびも手が空をきる螢かな　竹内弘子

あをくさくかたくつめたき螢なれ　竹内弘子
明滅の明の永きは勝ち螢　定梶じょう
顔見えぬ挨拶交す蛍狩　七郎衛門吉保
満てばひき引いてはみちて火の螢　定梶じょう
腐草蛍と化するころ無音界　篠田純子
蛍を見し日の遠し夫遠し　田中藤穂
足濡らし追うてもふはり蛍かな　秋川　泉
爪に灯を点したやうな蛍かな　大日向幸江
沈黙といふ黙認を悔ゆ蛍の夜　赤座典子
飲みこんだ螢が光る愛のごと　佐藤竹僊

これでもかといふ『あを』の螢たちである。最後に野坂昭如が昭和四十二年十月、『オール讀物』に発表された『火垂るの墓』がある。今全世界でジブリのアニメとして『火垂るの墓』が鑑賞されてゐるときく。

ぽとぽとと濡れ色こぼし火垂る虫　木村嘉男

螢が付いた植物がある。螢袋に拘る芝尚子の句も懐かしい。

一茎に螢袋の多きこと　芝　尚子
登つて下る螢袋は霧に堪へ　堀内一郎
白檜曾や螢袋の色の濃し　芝　尚子
父の忌のほたる袋の白きかな　芝　尚子
蜂もぐり蛍袋のこそばゆく　芝　尚子
下刈りののこせる螢袋かな　定梶じょう
蛍袋虻の唸りにふくらみぬ　早崎泰江
蛍袋ひかりの湧いてゐる羽田　篠田純子
叢のほたる袋は人なつこい　佐藤喜孝
おくゆかし蛍袋や蘇る　長崎桂子

螢草は露草とも詠まれる。ツユクサ科ツユクサ属なので「露草」が相応しいだらうが、「螢草」も捨てがたい。「ホタルサウ」といふ「ホタルグサ」とは違ふ黄色い花もある。葉室麟の「螢草」はＮＨＫで映像化され何回も読み、観た。

螢草壺に無聊の宵灯す　後藤志づ
草螢芭蕉隠密てふ話　田中藤穂
悔い残す別ればつかり蛍草　篠田純子
夕べにはそつと花閉づ蛍草　早崎泰江
蛍草縁切寺の黒格子　田中藤穂
外壁に「撤去ＯＫ」ほたる草　赤座典子
葦の辺に瑠璃色ゆらす蛍草　早崎泰江
崩れ初む草野にありて蛍草　森　理和
木道の傍に色濃き蛍草　赤座典子
蛍草わきに守宮を葬むれり　森　理和
蛍草ガス灯一台庭に立つ　石森理和
二年振り際立つ青の蛍草　長崎桂子
ほたる草足形土器のこぶりにて　佐藤竹僊
蜆ほどふくらみ明日の螢草　佐藤竹僊
朝顔に花のなき朝ほたる草　佐藤竹僊

あとがき

今月の表紙

東京・青山の上空を飛んでいる飛行機です。数分おきに上空を飛行機が飛びます。航路によって高度が違うようで、機影が大きく見える時と、割合小さく見える時があります。（撮影：墨沱）

句集

『he・俳』と題し『あを』創刊からの三年間に発表した俳句をまとめた句集。上梓の目的は、自作をまとめて手元に置いておきたいとのおもひからである。『the・俳』としたのはある日、私の俳句は〝雑誹〟だなあと気が付いたことからはじまる。〝雑誹〟が何であるかは詳らかにできないのにさうおもつた。そこからの句集名。今『あを』の発表句は「坐・俳」と題してゐる。杖をついての生活範囲は狭い。この題は今の私にピッタリ。次の句集か、次の次の句集名にと目論んでゐる。出版のお願ひをした「風詠社」はネットで探した。わがままな素人の願ひを聞き届けていただき、的確な校正をしていただいた。「後記」から

わたしは俳句を作つてゐるつもりだが先輩たちに訝しまれたものだ。俳句の中に私は隠れん坊をする。言葉と言葉のあひだに隠れん坊をする。隠れん坊をしてゐるうち日が落ち、夜の帳が降りて來た。早く探して欲しいなと思いつつ、上手に隠れたなと自己満足。隠れてゐるつもりでも「へきいろいあんよ」が見えてゐるかも。この句集に考槃や海鼠を家に連れ歸る

がある。ふた昔前の作。今まさに考槃の眞つただ中である。そろそろ自作を寵愛してもいい齢を得た。孫であるエイマの繪でカバーを作り嵩張らぬ體裁にした。たのしい作業であつた。

後記の記日は結婚記念日、発行日は恭子の命日にした。恭子は私の雑誹のよき理解者であつた。

エイマも今年高校生になつた。夢をみつけたやうである。他の孫たちも次々と羽化してゆくことだらう。今夏トンボの羽化をはじめて見た。針子を目高の池にみつけた。そんな夏に上梓できたことを喜んでゐる。（喜孝）

二〇二五年六月号
発行日　六月二十二日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
竹僊房
印刷・製本・レイアウト
カット／福井美佐子・ティリ　エイマ
会費　一五〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番　018）45864 02
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）